

令和6年度文部科学省委託事業 「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」報告シート
～教育的効果の高い長期自然体験活動の構築・普及事業～

【委託要項：様式B（別紙3）】

事業名 ウィンターチャレンジ in MIYAGI 団体名 宮城県

背景・課題

令和4年度、県内の不登校児童生徒数は、小学校で2,066人、中学校で4,122人で全国平均を上回り、過去最多となっている。不登校児童生徒の割合も、10年連続で増加しており、引き続き早期の対策が必要となっている。

事業趣旨

学校に登校していなかったり、学校に行きづらさを感じている児童生徒に、自然体験活動や長期宿泊体験を通して、自己肯定感を養い、人との関わりの中で社会的自立に向けた力を身に付けられるようにする。

事業の内容

- 1 実施期間
令和6年12月24日（火）～
12月28日（土） 4泊5日
- 2 実施場所
宮城県松島自然の家
- 3 参加者、人数
小学生8人、中学生7人 合計15名
- 4 主な活動内容
 - ・MAP（人間関係作り）
 - ・自然体験活動（ハイキング）
 - ・地域の特性を生かした体験活動
農業体験（いちごの摘みとり）
漁業体験（のりすき体験）
 - ・ふれあい体験（乗馬、エサやり等）
 - ・創作活動（空き缶ランタン、勾玉作り）
 - ・読書活動



- 5 体験活動の支援者
 - ・生涯学習課職員（社会教育主事）
 - ・松島自然の家職員（社会教育主事）
 - ・大学生ボランティア

- 6 その他
 - (1) 事前説明会・体験会
 - ①令和6年10月26日（土）
 - ②令和6年11月16日（土）

内容：趣旨説明、施設見学、
ニュースポーツ体験

- (2) 保護者対象プログラム
 - ①講話・ワークショップ
 - ②茶話会、交流

<支援にあたるための工夫>

- ・大学生、スタッフは、子どもたちの「思いや考え」を大切にすること。
- ・意図的な問いかけを行い、言葉を引き出し、共有、共感する。
- ・安心安全な事業の実施のため、養護教諭、看護師の帯同を基本。



成果

- 年齢の近い大学生ボランティアが参加者の近くで見守り、活動することで、安心して活動することができた。
- 意図的な問いかけにより、考える機会、自分の思いを話す機会が増え、共有、共感してもらうことで、「人と関わる」ことに自信を付けた。
- 宿泊体験の中で、「自分のことは自分ですること」「早寝早起き」などの自己管理に関する意識が高まった。
- 宿泊に不安のある参加者が保護者の協力により、日帰りですべての体験活動に参加することができた。
- 自己選択する機会をたくさん経験したことで、自信や達成感を得ることができた。それにより、自己肯定感の高まりがみられた。
- 期間中に2回の保護者プログラムを実施したことで、保護者の交流を図ることができた。
- 運営委員の心理学専門の大学教授より活動内容や支援等について助言いただいたことで、子どもたちにとって適切な支援につながった。

普及と今後の展望

- 県内のNPO法人に情報提供したことにより、本計画を参考にしてNPO法人のフリースクールに来ている子どもたちを対象とした1泊2日宿泊体験活動を実施した。自然の家を利用して、創作活動やスポーツなど、子どもたちが自主的に活動できるプログラムにすることができた。来年度以降も継続し、今後は参加者の中から実行委員を選出して進めていく予定。
- 来年度以降、県の新規事業として、学校に登校していない児童生徒を対象とした1泊2日の宿泊活動を行う予定。将来的に自然の家の主催事業として実施する予定で計画している。

「ウィンターチャレンジ in MIYAGI」

令和6年12月24日(火)～12月28日(土) 4泊5日【会場：松島自然の家】

＜目的＞

学校に行きづらさを感じている児童生徒が、自然体験活動や長期宿泊体験を通して、自己肯定感を養い、人との関わりの中で社会的自立に向けて、次のステップに進むことができるようにする。

＜内容＞

MAP、農業体験、動物ふれあい体験、創作活動、ハイキング、漁業体験、ブックトーク等

＜参加者＞

15名（小学生8名、中学生7名）



＜参加者の感想＞

- ・新しく作った友達とたくさんの思い出が作れてうれしかったです。
- ・ウィンターチャレンジに行ったときに仲良くなった子と（まだ）会いたいです。
- ・非常にいろいろ学べたなと思います。一緒にいてくれた大学生等の優しい心もいれなと感じました。とにかくよい4泊5日でした。
- ・サイコーに楽しかった。今度はボランティアで参加したい。
- ・みんなと仲良く交流できたし、ごはんもおいしかった！
- ・必要なことができるようになりました。
- ・他の人とコミュニケーションをとれる機会があって、とても良かったです。



＜保護者アンケートより＞

- ・初めてテストにチャレンジすることができた。「勉強がしたい」「学校外での学習先を見つけたい！」と言われました。
- ・感謝の言葉が増えました。
- ・これから中学に向けて勉強や部活を頑張りたいと、前向きな発言をするようになった。
- ・大学生の皆さんに憧れるようになり、大学生になってボランティアをしたいと話そうになった。学校には行けていませんが、「大学生」という目標を見つけ、学校に戻る準備を始めた。
- ・しっかりとご飯を食べるようになった（食事が増えた）
- ・言葉は少ないながらも、表情や行動が変わりました。驚きです。
- ・朝はとてもつらそうにしていますが、「学校は休まない」と決めたとのことで、毎日頑張っています。



＜大学生ボランティア どのようなことを心掛けたか＞

- ・同じ目線で話すことやできるだけ子どもが自分自身で考えて行動するように見守ること。
- ・子どもたちの表情をよく見て変化に気付けるようにした。
- ・一緒にいる空間が楽しいと思えるようにしよう。
- ・子どもたちが「こうしたい」と自発的に言っていることに対して「否定しない」よう意識した。
- ・メリハリを意識して関わるようにした。

IKR 調査による「生きる力」の分析

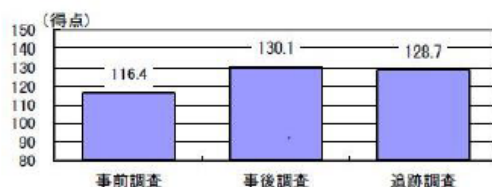


図1. 「生きる力」の平均値の推移



「生きる力」を示す指標では、事前調査から追跡調査にかけて12.3ポイント向上した。

＜まとめ＞

- ☆「生きる力」の向上がみられ、一か月後も効果が継続している。
- ・参加者が安心して参加できるように、体験会から当日まで同じ大学生ボランティアにサポートを依頼した。→大学生に会えることを楽しみに参加した子どももいた。
- ・事前健康調査等により、支援についてスタッフで情報共有して事業をスタートしたため、子どもの特性に合わせたきめ細やかな支援ができた。
- ・つどいなどの活動で、活躍できる「場」や自己選択の機会、「承認」される機会をたくさん設定したことにより、参加者の自信につなげることができた。
- ・グループ活動時に役割分担することで、自分の役割を意識して活動できた。
- ・期間中、養護教諭や看護師に帯同してもらうことで、服薬や体調の変化に適切に対応することができた。気持ちの不安定な部分にも、寄り添って対応することができた。
- ・自分の考えや思いを表現すること、思いを共有する「こころマップ」を毎日記入し、グループの一体感、自分の居場所、目標の達成感を味わうことができた。
- ・保護者プログラムを実施し、保護者同士の情報交換や交流を行うことができた。

※IKR 調査とは・・・独立行政法人国立青少年振興機構が開発した、体験活動による教育効果を図る手法の一つで「生きる力」を測定できるアンケート調査